

池谷仙之理事長、ありがとうございました

事務局



故池谷仙之理事長

当 NPO の池谷仙之理事長は、本年 11 月 4 日逝去されました。満 72 才でした。

池谷先生は、NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク設立時から理事長として就任され、当会の要としてその発展に尽くされてきました。静岡大学の教授として、静岡県地学会、日本古生物学会、国際オストラコーダ学会などの会長を歴任され、その幅広い人脈は、当 NPO の普及啓蒙にはなくてはならない方でした。その信念に基づく、歯に衣を着せぬ発言は、時として私たちがはらはらするほどでしたが、言うべきことはきちんとするという姿勢を貫かれました。

実は池谷先生は、大学退官前に、肺ガンため肺の一部を手術で除去されました。その後再発の兆候はなく 7 年ほど過ぎたのですが、昨年未頃より、胸腔に水がたまり少し体調を崩され、今年の NPO 総会の頃には、痩せられて心配していました。その後、6 月頃より念のため、入院され様子を見ておられましたが、7 月頃からは食欲が落ち、点滴だけで体力を維持しており、一進一退を繰り返された後、11 月 4 日夜、ついに帰らぬ人となりました。

葬儀につきましては 11 月 9 日に、池谷先生のご意思によりご親族だけの密葬にて行われました。

静岡大学などの学術的業績は、後に述べる



ナウマンゾウ発掘調査の指揮をする池谷先生

として、当会理事長として、またプライベートな池谷先生の思い出についていくつか紹介してみます。

第 3 次ナウマンゾウ発掘調査

大学在職中に浜名湖周辺などで 2 回にわたりナウマンゾウの発掘調査をされていましたが、退官後、2006 年 12 月に当 NPO の調査事業として、第 3 次ナウマンゾウ発掘調査を、牧之原市で実施し、発掘責任者として指揮されました。年末でしたが、1912 年にここで骨や歯が出土した古谷層を 3 日間にわたり掘りました。残念ながらナウマンゾウの新しい化石はでませんでした。シカと思われる椎骨や樹木、昆虫などの化石が見つかりました。先頭に立って発掘していた先生が今も目に浮かびます。

長野戸隠森林公園でのクマとの遭遇

2004 年 9 月、長野県環境保全研究所飯綱庁舎の施設見学に行き、翌日、戸隠森林植物園内の自然観察をしていたところ、若いツキノワグマに遭遇しました。クマは空腹だったようで、こちらを気にすることなく、ドングリをおさぼるように食べていました。近い時にはほんの数メートルの距離で、写真を撮りましたが、すぐに逃げられるように池谷先生がへっぴり腰で写真を撮っていたのを、おかしく思い出しました。



クマの写真を逃げ腰で写している

自宅の庭にツリーハウス

池谷先生は、退官後は好きなことをやりたいと、奥様に宣言していたようですが、実に色々なことに挑戦されていました。自宅の表札には「Euplectella House」と書いてあります。これはカイロドウケツと言う海綿の仲間の学名で、中にドウケツエビというエビが片利共生します。このドウケツエビは、つがいで一生をこの中で過ごすことを池谷先生はご存知で、晩年奥様と仲良く過ごされることを考えられてつけられたとのこと。また家の向かい側には、誰でも集まって話をしたり、泊まったりしながら、楽しく過ごせるようにゲストハウスを、2000年の自宅新築時に建てられ、「雨読庵」と名づけられました。さらに、2007年には庭の木を利用し、地上10mにツリーハウス「東風坊」も造られました。基礎部分を除いては、殆ど1人でコツコツと作業され、完成後にはDIYの雑誌にも紹介されるほど素晴らしい出来栄でした。部屋は小さいのですが、そこでのんびり一杯やったり読書したりするのが、楽しみだったようです。また、庭の中に浸み出した小さな流れでホタルを育てたり、ニホンミツバチの巣箱



玄関の表札



ツリーハウス名 東風坊



ツリーハウス 池谷先生のお宅での古希の集い時



池谷先生と、絵画教室の作品

を置いたりして自然を満喫しておられました。

さらに地域の古民家を保存するためのNPO勝間田塾の発足に尽力され、古民家の改修や保存にも積極的に関わっておられました。

我々も、何回か、御自宅でのバーベキューに招待されましたが、自然の中で、自然に親しみながら暮らされている池谷先生は、とても魅力的でした。

当NPOにとっては、かけがえのない理事長を失いましたが、理事長が存命中に果たせなかった県立自然史博物館を設立させるのが、残された我々の使命と思っています。

まだまだ静岡県立自然系博物館設立に向けての状況は整ってきてはいませんが、少しずつではありますが一步一步前進しています。

つつしんで、池谷仙之理事長のご冥福をお祈りします。

池谷仙之先生の略歴と業績

出生

昭和 13 年 5 月 2 日 東京都国立市にて

略歴

昭和 32 年 3 月 東京都立立川高等学校卒業
昭和 39 年 3 月 横浜国立大学学芸学部地学科卒業
昭和 41 年 3 月 東京大学大学院理学系研究科修士課程地質学専攻修了
昭和 44 年 3 月 東京大学大学院理学系研究科博士課程地質学専攻修了
学位論文 Structure and succession of foraminiferal populations
昭和 44 年 4 月 日本学術振興会奨励研究員
昭和 45 年 4 月 静岡大学理学部助手
昭和 48 年 10 月 東京大学理学部助手
昭和 51 年 4 月 静岡大学理学部助教授
昭和 63 年 4 月 静岡大学理学部教授
“ 静岡大学理学部地球科学科長
平成 10 年 4 月 静岡大学大学院理工学研究科長
平成 16 年 3 月 静岡大学理学部定年退官
平成 16 年 4 月 静岡大学名誉教授



日本古生物学会賞
受賞記念パーティーにて

学会における活動

昭和 60 年 第 9 回オストラコーダ国際シンポジウム事務局長（静大開催）
平成 9 年 日本古生物学会会長（平成 11 年まで）
平成 9 年 国際オストラコーダ学会会長（平成 13 年まで）
平成 13 年 第 14 回オストラコーダ国際シンポジウム大会長（静岡大学にて開催）
その他 日本地質学会、日本海洋学会、日本ベントス学会、日本第四紀学会、東京地学協会、
日本比較生理生化学学会、アメリカ古生物学会、アメリカ応用古生物・鉱物学会に所属
平成 20 年 日本古生物学会賞受賞

社会における活動等

昭和 63 年 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員
平成 3 年 日本学術会議古生物学研究連絡委員会委員
その後、日本学術振興会、日本学術会議の各種専門委員などを歴任
平成 11 年 静岡県地学会会長
平成 11 年 静岡県立自然史博物館設立推進協議会副会長
平成 15 年 NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク理事長



古生物学会賞メダル

著書

日本古生物図鑑、北隆館 1982 新生代甲殻類（貝形虫）執筆
化石の科学（日本古生物学会編）朝倉書店 1987 化石を拡大する 1. 執筆
進化古生物学入門—甲殻類の進化を追う— 東京大学出版会 1993 山口寿之氏と共著
太古の海の記憶—オストラコーダの自然史— 東京大学出版会 1996 阿部勝巳氏と共著
古生物学入門 朝倉書店 1996 間嶋隆一と共著
古生物学の科学 1、古生物学の総説・分類 朝倉書店 1998 介形虫（亜綱）類 執筆
古生物学の科学 3、古生物学の生活史 朝倉書店 2001 棚部一成氏と編集
地球生物学—地球と生命の進化— 東京大学出版会 2004 北里 洋氏と共著
しずおか自然史 静岡県自然史博物館ネットワーク 静岡新聞 2010 監修
その他英文著書・翻訳も多数

図書紹介 「しずおか自然史」の発行

副理事長 三宅 隆

平成 19 年 9 月から平成 22 年 3 月末まで、毎週 131 回にわたって静岡新聞日曜版に連載されていた「しずおか自然史」がこのたび単行本として再編集し、静岡新聞社から発行されました。県民に、静岡の自然の素晴らしさ、県立自然史博物館の必要性を伝えるために連載してきましたが、このように長く続く連載は、新聞社にとっても異例のことだそうです。

この連載に当たっては、池谷理事長が責任者として全ての編集に関われました。73 名もの各方面での専門家に執筆いただいたのですが、中には池谷先生から文章の修正が入り、執筆者と多少やりとりすることもあったようですが、最後まで池谷流を貫かれ、ほぼ統一した文章で終わる事ができました。



単行本作成に当たっては、連載された項目を、5 つの章に再編成しました。

第 1 章 静岡県の土台では、静岡県の成り立ちを 12 編で。第 2 章 地層（化石）が語る静岡県では、地学関係を主体に 22 編を。第 3 章は、県内でも見られる生き物たちとして、28 編。第 4 章は、静岡県で注目すべき動植物として、県下に特徴のある生物を 33 編収録。第 5 章 変わりゆく生物界では、絶滅のおそれのある動植物や外来生物、温暖化などによる変化を 33 編掲載してあります。それぞれの章の最後には、コラムを入れてあります。

オールカラーで 280 ページにもなる立派な本に仕上がりました。

この本の発行にあたっては、池谷理事長が編集され、病気療養中にも、静岡新聞出版局との調整や校正に奔走しておられました。入院されてからも、週末は自宅に帰って編集作業に当たられるなど、この本の発行に全力を傾けられました。最後の頃には、病状が悪化して、編集を私に託されましたが、10 月 7 日に完成した本を持って、一番に入院中の池谷先生に報告にいったところ、本を手を持ってじっと見つめておられた姿が忘れられません。池谷先生のご存命中に本を完成できたのが、せめてもの救いでした。

NPO では、この「しずおか自然史」の本の斡旋を行います。

県内の本屋で購入できますが、定価は税込み 2,500 円で当 NPO では著者割引価格の 2,000 円で斡旋します。これに送料（1 冊 160 円）がかかりますが、振込料をいれても、1 割引でお渡しできることとなります。

購入希望者は、葉書に送付先の住所氏名、希望冊数を記入の上、下記にお申し込みください。郵便振込み用紙を同封しますので、本の受領後代金を振り込んでください。

〒424-0878 静岡市清水区御門台 10-13（三宅方）静岡県自然史博物館ネットワーク宛
自然博ネット メール（spmnet@bz01.plala.or.jp）でも受け付けます。

自然観察会報告 静岡市梅ヶ島安倍峠 水野米利子



杉野先生の説明を聞く

10月24日（日）に静岡市梅ヶ島安倍峠で自然観察会が行われました。今回の目的は紅葉です。当日は12人の方（案内者3名）が参加してくださいました。静岡駅から車で約1時間、小さな町を抜け、曲がりくねった坂を越え今回の出発点に到着しました。

車から一步出ると今年の灼熱の夏を一気に忘れさせるような寒さを感じ身震いがしました。観察会はず、植物が専門の杉野先生の説明から始まりました。先生によると今年は暖かい日が続いたため紅葉が一週間程遅れていて、ここ数年の気温の変動で今は紅葉の時期を見定めるのが難しいとのことでした。

今回の幹事の三宅さんを先頭に道路を少し歩いた後、脇の安倍峠に続く山道に入りました。5分くらい、細く少し険しい道を歩くとすぐに沢の流れる静かな山あいに出ました。みなさん少しずつ歩きながら気になった木々の種類を一つ一つ確かめたり、写真にとったりして歩いていました。説明を受けるだけではなくなかなか難しかったカエデとモミジの種類の見分け方も実際に葉を手にとって先生の話も聞いているうちにすぐに自分で見分けられるようになりました。木の中には種類の表示の付いている物もあったのですが何点かは表示が間違っており杉野先生に正しい名前を教えて

いただきました。

歩いて行くと鹿による樹皮の食害や泥浴びの跡を観察することができました。そこは少し獣のにおいが漂っていて、足元をよく見れば鹿の糞があちこちに落ちていて、野生動物がとても間近に感じられました。私は鹿による食害を見るのは初めてだったのですが、鹿の食べる木の皮は漢方を思い起こさせ、見た目には健康に良さそうに感じられました。また、鹿に食べられた跡の木の表面はつるつるしてまるでやすりできれいに磨かれたようでした。鹿は、冬の食べ物が少なくなる時期に樹皮を食べるそうですが、周りはあまり緑が減っているようには見えなかったので、まだ食べ物となりそうな植物があるのに鹿がなぜ食害をするのか、みな不思議そうでした。

参加した人の中には沢でサンショウウオを探す人もいて、初めてヒダサンショウウオの成体とハコネサンショウウオの幼体を間近で見ました。参加者の中にも今までサンショウウオを見た事がなかった方が多くみなさん興味深そうにのぞきこんでいました。また県内にサンショウウオが生息している事実を初めて知り驚いている様子でした。

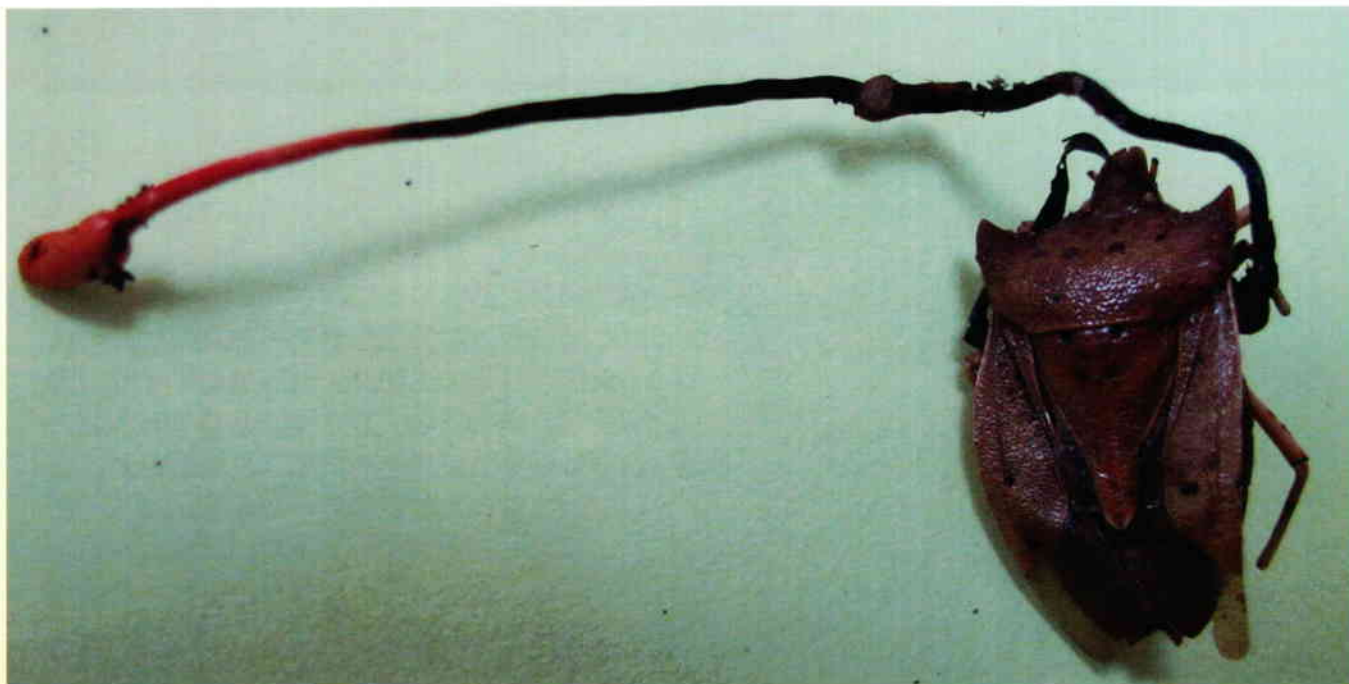
安倍川の源流も見ることができました。安倍川の源流もまた初めて見たので、あれ程大きな河がとても小さな湧水から始まっているとは驚きでした。

目的地の安倍峠に到着すると、個々で座る場所を見つけて昼食を取りました。昼食中にソウシチョウが近くでさえずっているのが聞こえ、楽しませてくれました。その後参加者は道路を通過して下山しました。

今回の観察会では約14種類の主な植物と静岡県内で見られるカエデとモミジを全て見ることができました。中には絶滅危惧種に指定されているイワシャジンや大型の花フジアザミも見ることができました。

カメムシタケ (冬虫夏草の1種)

高山壽彦



カメムシタケ

冬虫夏草とは、虫に寄生するキノコの総称です。中国では、『冬には虫（陽）であったものが、夏には草（陰、キノコ）になる』という現象が注目され、陰陽二気の消長が冬虫夏草を育てるという易思想から尊ばれ、四川省、雲南省、青海省、甘肅省やチベット、ネパール、ヒマラヤの標高3,000～4,000mの高山帯に分布する *Cordyceps sinensis*（コウモリガの1種 *Thitarodes* sp. の幼虫に寄生するキノコ）を『冬虫夏草』と称し、古来より漢方（不老長寿、強請強壯の秘薬、結核、黄疸の薬、またアヘン中毒の解毒薬）と、薬膳料理に用いられており、この中国名がこの仲間の総称となりました。日本では、江戸時代の享和元年（1801年）に柚木常盤により、図説『冬虫夏草』が刊行されたほか、薬用に供された記録では、筑後八女郡（現在の福岡県）の山中で産出されたカメムシタケが、肺病・肋膜炎（肺結核）の特効薬として夏草冬虫の商品名で市販された記述があります。

カメムシタケ *Cordyceps nutans*

2010年08月25日、静岡市葵区井川田代の東河内沢上流での生物調査時、落葉広葉樹林の林床で冬虫夏草のカメムシタケを、採集しました。採集したものは、トホシカメムシ *Lelia decempunctata* の胸部右端から生えており、トホシカメムシ本体は数枚の落葉下に横たわり、地中にはほとんど埋まっています。地表には3cm程度の黒色の頸部（柄）が出ており、その先の赤色の頭部（ストローム）が目立っていました。土の中や落葉下から発生する地生型の冬虫夏草は、沢沿いの土手で見つかりやすいといわれており、調査地が河川付近で、適度な湿り気のある樹林環境のため、地表に注意して歩いていたことが幸いしました。

カメムシタケの胞子は、カメムシが活着しているうちにとりつき、カメムシが死んで（カメムシを殺して）キノコを伸ばすと言われていました。また、地中から生えるハチタケでは、地中に潜ることのないアシナガバチから発生することから、ハチタケの胞子に取り付かれた後に、何か起こるのではと言われていました。このように冬虫夏草には不思議なことがたくさんあるようです。これからも地面を見つめて捜したいと思います。

富士市南松野で発見された魚類化石

横山謙二・宮澤市郎



ニシン科コノシロ亜科の魚類化石

平成22年4月3日、富士市南松野に分布する庵原層群岩淵層より、筆者の一人である宮澤市郎氏により魚類化石が発見された。この魚類化石は、大変保存状態がよく、尾部の一部が破損しているものの、ほぼ分類に必要な形質がすべて備わっており、現地性の化石と思われる。体形の特徴からニシン目ニシン科の魚類であることは明らかで、さらに背鰭の最後の鰭条が長いことや、腹鰭周辺の腹縁に稜鱗があること、また尾部の骨格の特徴から、コノシロ（ドロクイ）亜科に同定できることが明らかになった。現世のコノシロ亜科は6属22種に分類され、その分布は、東南アジア地域を中心に、中東地域アラビア海やアメリカのメキシコ湾・カルフォルニア湾周辺に分布する種もある。その生息環境は、内湾などの浅海か、汽水域に見られる種が多いが、中には、完全に淡水に適応した種もいる。日本にはコノシロ、ドロクイ、リュウキュウドロクイの2属3種が生息しており、主に内湾や汽水湖の浅海の泥底付近に生息する。

化石が産出した地層は、主に泥質堆積物からなり、細かく見ると厚さ1mm以下の泥層や砂層の層が規則的に重なり堆積している。この堆積物は、湖底の堆積相を示すリズムイト（Rhythmites）やラミナイト（laminites）、氷縞（Varve）などと呼ばれるものと同じ特徴を示す。この層からは、たくさん木葉化石や海生の貝類などの化石の産出が認められている。これらのことから、この層が堆積した当時、汽水あるいは、海水湖であったと推定できる。

化石が発見された層準からは他にもいくつか保存状態の良い魚類化石が見つかっている。このような保存状態の良い魚類化石が多産する産地として、ワイオミング州の南西部のGreen River魚類動物群、オーストラリアの下部白亜紀系Koonwarra淡水動物群などが知られている。これらの化石産地の地層は、今回の化石が発見された層準と同じ湖底の堆積物であることが報告されている。また大量の魚類化石が発見されることから、魚の死と埋積保存が短い期間に行われたとする見解があり、その魚の死因は無酸素・貧酸素水塊が関係するという推定がなされている。湖の環境下で夏季に貧酸素水塊が発生することはたびたびあり、現在の湖でも魚類の大量死は湖でたびたび認めれ、その魚の死因が、貧酸素水塊と関連するという報告もされている。おそらく、今回の魚類化石の死因も、このような貧酸素水塊に関係している可能性があり、また大量死があったとすると、今後この層準からさらに、多くの保存状態の良い化石が見つかることが期待できる。

このコノシロ亜科の化石については現在論文作成中で、もっと詳しいことが明らかになり次第、また報告し、どこかで展示したいと考えている。

駿河湾の深海魚 (3)

ミツクリエナガチョウチンアンコウ (その1)

久保田 正・佐藤 武

長い和名が付いているアンコウ類の1種、深海魚のミツクリエナガチョウチンアンコウについて紹介します。ミツクリというのは、東京大学理学部動物学教室の初代教授であり、東大の三崎臨海実験所を設立した箕作桂吉(みつくりかきち)博士にちなんでつけられました。

本種は、アンコウ目ミツクリエナガチョウチンアンコウ科に属し、世界中の深海から知られている2属4種のうちの1種です。

水深200～1000m位に生息しており、体は軟らかく、黒い色です。駿河湾に生息し、大きい個体から小さい個体まで、夜間に湾内で行われているサクラエビ中層引き網により度々混獲されるので、稀な種類ではありません。夜間に餌を求めて上昇してきたものと思われる(図1)。

このアンコウの雄は、成長の過程で特有の歯を用いて雌の体と一体化すると鰓や心臓を残して精子をつくる精巣のみが異状に発達します。図2は、図1の体長265mmの個体に付着(寄生)している雄です。

極端に小型化している雄は、雌の体に付着して一生雌に面倒を見てもらっています。このように雌より極端に小さい雄のことを矮雄(わいゆう)と云い、チョウチンアンコウの仲間にはたびたび見られる特徴です。また、良く発達した精巣を持った自由遊泳する雄が採集されないことから、付着

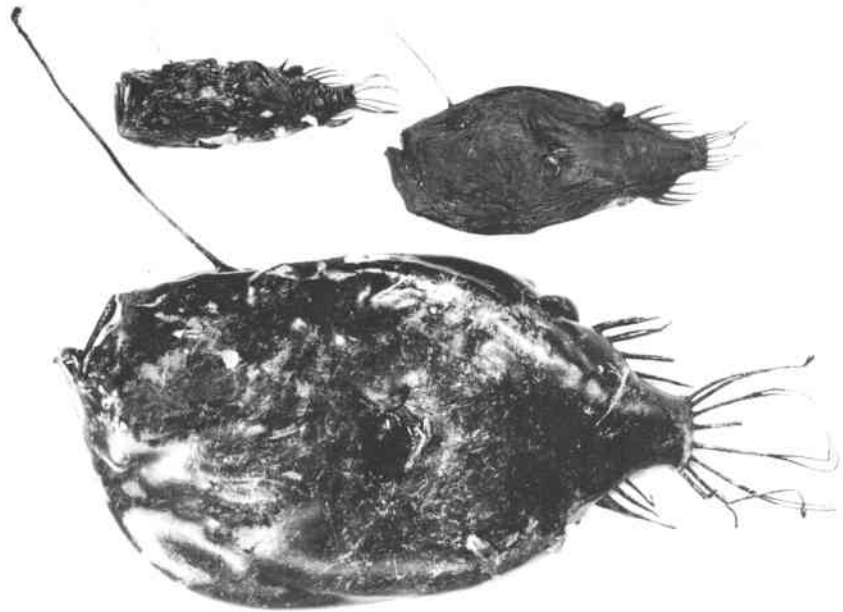


図1 サクラエビ網に混獲の個体

上・左: 1968年2月10日混獲、体長117mm

上・右: 1978年5月15日混獲、体長143mm

下: 1978年6月3日混獲、体長265mm

(腹部に雄が付着、拡大は図2)

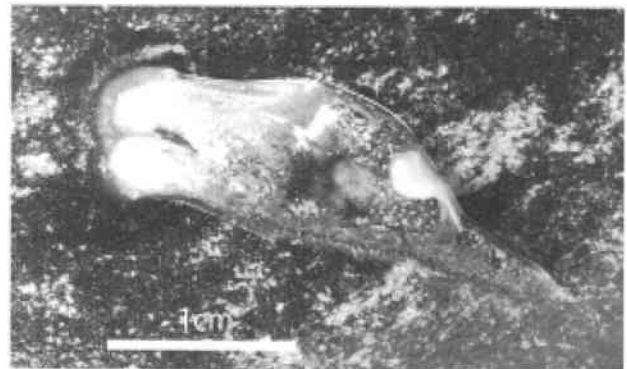


図2 雌の腹部に付着している矮小の雄

図1の下の個体に付着、全長25mm

できなかった雄は最終的に死んでしまうと言われていています。当湾産の個体では雌の体長約150mm以上になると雄が付着しています。雌の体に付着する雄の数は、1個体とは限らず複数のこともあり、多いのでは5個体の報告があります。

出前博物館報告（1）

富士山こどもの国 富士山の自然展

榊原英幸



展示を見る来館者



来館者に説明をする

私事ですが、子育てがすっかり終わってしまった世代としては、無縁の地、富士山こどもの国。50代の男性がたった一人でウロウロ園内を歩いていたら、変な人がいるよ！と家族連れに避けられてしまいそうなほど、みんな子連れです。本当は行きたいのに、孫でも出来ない足が向かない施設かもしれません。そんな富士山こどもの国の広い園内の中程、街エリアという中核エリア、丸っこい形状のこどもセンターの1階で展示会は行われました。

まず、9月8日から28日までは「富士山のできるまで」と題された富士山の地質の展示。平面なのになぜか立体的に見えてしまう赤いカーペット状の地図。溶岩の熱で燃えてしまった木の幹を取り囲む、溶岩樹型。各種火山弾。二色めがねで見る3D富士山地形図。などが目玉。

そして、10月1日から31日までは「富士山の生き物たち」と題された動物と植物の展示。その展示会開催中の17日(日)に解説者ということで参加してきました。丸っこいこどもセンター入口を入り左手の壁際には富士山の植物の写真パネルが並びます。丸い受付を回り込むと、動物のコーナーになります。ほ乳類はコウモリ、ネズミ、モグラの剥製標本などとサルやイノシシなどの頭骨やチョコエッグのおまけのフィギュアが並びます。その奥に鳥類が展示されています。富士山に生息する鳥類の写真パネルの他に、富士山の垂

直分布を表現した棚にチョコエッグのおまけたちが並びます。昆虫類は解説や写真パネルの他に中央の展示台の上に富士山のチョウ・甲虫類やバツタが標本箱に埋め尽くされるように並んでいます。

さて当日観覧者は10時から15時までで(12時30分から13時20分を除く)16組約50人ほどの観覧者がありました。別のイベントに参加した子供を待っているようなお父さんや女性2人組の計3名を除いて、全てが小学生以下の子供を連れた家族と思われる小単位のグループでした。

観覧者の滞留時間はほとんどが5分程度で、受付に立ち寄ったついでに見ていくグループがほとんどでした。

解説のパネルや写真パネルを見ている大人や子供もいましたが、富士山こどもの国のスタッフが用意してくれたミズカマキリの水槽や、ウスバシロチョウが並んでいる標本箱やほ乳類の糞や、ネズミ、モグラの標本箱はインパクトがあるようで感嘆の声を上げていました。動く物、形ある物に目が向くようでした。以上で報告終わります。

最後に富士山こどもの国のお得な情報。富士山こどもの国クラブに入会すると入園料金が半額になります。入会金はもちろん無料。半額は大きいですよ。勿論私も入会しました。

出前博物館報告 (2) る・く・る 富士山の自然展

横山謙二

静岡科学館る・く・る 10 階のガレージにて、9 月 2 日～ 26 日にかけて「富士山の生き物たち」、10 月 9 日～ 11 月 7 日にかけて「富士山のできるまで」の計 2 回の出前博物館を開催しました。展示内容は、8 月に静岡県自然学習資料センターで行ったミニ博『富士山の自然展』の展示物で、地質系と生物系に展示期間をわけ展示しました。

開催期間中、たくさんの来場者に見学していただき、3D の富士山立体地図や触れる溶岩樹型などは、子供たちに好評だったようです。

今後、富士山の自然展は、平成 23 年 1 月 1 日～ 4 月 4 日まで静岡市清水区三保の東海大学自然史博物館にて展示します。まだ、富士山展を見ていない方は、東海大学自然史博物館で見学してください。



富士山の自然展
10 月 9 日～ 11 月 7 日の
『富士山のできるまで』

出前博物館報告 (3) 藤枝エスペース 富士山の自然－富士山の生き物たち－

佐藤貴恵



藤枝エスペースの展示

11 月 2 日から 28 日において藤枝のギャラリーエスペース shiroko にて「富士山の自然展」を実施しました。標本や解説の展示により、富士山の自然について学んでいただくと同時に、静岡県に貴重な資料が所蔵されていることの周知が目的です。新聞への掲載はあった



展示をご覧になる来館者

ものの、解説員が派遣された日は来訪者が少なかったことは大変残念でした。私達は資料の所蔵という重要な面を担いながら、自らが広く一般の方々に広報を行うというソフトな面も今まで以上に行っていかなければならないということを強く感じた出前博物館でした。

展示会報告（4） る・く・る 外来種展

横山謙二



11月13日より開催中の外来種展



すでに、静岡市内で分布が確認された
アライグマの展示



骨格標本や剥製標本の展示



外来種の植物実物標本やその他の外来種

11月13日（土）から12月12日（日）にかけて、静岡市科学館る・く・る10階のガレージにて、「静岡県の外来種展」を行っています。これで、る・く・るで行う出前博物館は、3回目です。

外来種の説明、外来魚類、外来鳥類、アライグマ、ハリネズミ、その他の外来生物、外来植物の7テーマの内容の説明や写真のパネルの展示のほか、ソウシチョウやハリネズミの剥製標本、アライグマやハクビシンの毛皮、タイワンリス・ハリネズミ・アライグマなどの骨格、など珍しい標本を展示しています。また、アライグマの分布調査で使用した自動撮影カメラなども展示しています。目玉は、

意外と知られていない、静岡市内に繁殖し、分布を拡大しつつあるアライグマの展示です。内容的には、小学生でもわかりやすく、なぜこれら外来種が生息し繁殖してはいけないかということを理解してもらえるようにしたつもりです。

今回の展示では、特定外来種の問題は、すでに身近な問題になってきていることを知っていただくと良いと思います。

この展示の後、る・く・るでは、平成23年1月8日～2月13日にかけて「ジュラ紀の地球展」への展示協力、2月19日から3月13日にかけて「静岡県の希少生物展」を開催する予定です。ぜひ、興味のある方は、訪ねてください。